



北海道 函館市 伊藤の高炉寺古武井海岸恵山 2011.11.14



2005.11.14.

11月14日早朝 函館 湯の川温泉から出発。

昨日夜 函館山からの夜景の興奮がまだ冷め遣らぬ中、レンタカーで函館の東 渡島半島の一番先端にある活火山恵山へ。

幕末に日本最初の洋式高炉が建設された地「古武井」がこの山の麓海岸にあり、その海岸には砂鉄の浜が広がっているという。

今年の春 函館から鉄山を通過して 縄文の里「南茅部」に行った時、残念ながら回れなかったところで、是非とも訪れたかった場所である。



日本で最初に建設された古武井の溶鉱炉

参考 和鉄の道 Iron Road 2005

函館郊外の地図にある「鉄山」の地名を訪ねて 2005.4.24.

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/hakotetsu.htm>

日本初の洋式高炉 古武井 溶鉱炉 恵山町高岱（現函館市恵山町）

幕末 箱館奉行が大砲を鑄造するために安政3年(1856年)函館東部沿岸の砂鉄を利用した大規模な製鉄事業を計画し、溶鉱炉・反射炉等の設計・建設を蘭学者の武田斐三郎に命じた。

武田は蘭学書からの知識と来航していたイギリス人やフランス人からの助言を頼りに、古武井(亀田郡恵山町)に溶鉱炉を建設した。せっかく建設された溶鉱炉であったが、よい成果が得られず、文久3年(1863年)、暴風雨により大破し放棄された。

現在 主要部分は破壊されており、切り石で組まれた基段及び水車水路が残っている。

我が国最初の高炉建設の試みの一つとして貴重な遺構である。また、武田斐三郎は日本最初の洋式の城「五稜郭」の築城社としても有名な科学者である。



<http://www.dokyoj.pref.hokkaido.jp/hk-osmky/shakyo/bunkazai.htm#modori>

2. 武田斐三郎の溶鉱炉 多田浩平氏のホームページ

<http://nt.hakodate-ct.ac.jp/~j03330/homepage/youkouro.html>

1. 函館湯の川から鉄山を越えて 古武井の海岸へ



日本最初の溶鉱炉が建設された
古武井海岸 2005.11.14.

湯の川の丘の上にあるトラピスチヌス修道院を見学した後、そのまま亀田半島を横断して南茅部に出る山声の道をとる。今年の春「鉄山」の名に惹かれて バスで越えた道である。そして、春はそのまま鉄山から「縄文の郷」南茅部へ山を越えましたが、鉄山から右に折れて、山間の道を亀田半島を縦断して海岸部の古武井海岸へ出て 恵山へ向かう。



亀田半島中央にそびえる三森山 2005.11.14.

湯の川から峠に上ってゆくとを越える

と左手に広大な草地在り、その向こうに三森山が裾野を引いている。青空バックの姿が素晴らしく、ついつい車を止めて見とれました。

山中を走り出して 10分ほどで前回訪れた時にびっくりした鉄山の採石場の横に出る。



鉄山 柱状節理の粗粒玄武岩の採石場 春 鉄山を訪れて 2005.4.24.

恵山から駒ヶ岳に続く火山地帯のほぼ中間点に当たり、赤茶けた山肌に黒く柱状節理状に縞模様の粗粒玄武岩の岩脈 地下でのマグマが昇ってきて、他の岩の層に貫入凝固した半深成岩。マグマの鉄がこのあたりで鉄鉱脈を作ったり、鉄分を多く含んだ岩の山が形成されている根のだろう。「鉄山」の名もそこから来たのかもしれないと思っている。また、これら恵山から駒ヶ岳に続く火山帯での火山活動が亀田半島の山々を形成し、海岸部に大量の砂鉄を堆積させた。

鉄山から右に折れて山間を亀田半島を縦断して海岸部へ向かう。

もう 松かな落葉樹の紅葉は終わっているが、蝦夷松や白樺などの木々の枝が浮き出してきた 北海道独特

の素晴らしいモノトーンの濃淡を作っている。おそらく今しか見られない紅葉である。



北海道特有のモノトーンの紅葉が素晴らしい鉄山より亀田半島の山中を古武井の海岸へ 05.11.14.

木々の織りなす紅葉を楽しみながら山間を下ってゆくと 20 分ほどで女那川海岸に出て、函館から海岸沿いを走る持ちと合流して北に進路をとる。行く手 岬の先端にこんもり御椀型で茶色の地肌を見せる山が見える。これが渡島半島先端の活火山「恵山」。



写真で見たりして噴煙を上げる荒々しい活火山「恵山」を想像していたのですが、紅葉した山々上にちょこんと頭を突き出すきわめておとなしい姿に一瞬戸惑う。

荒々しい恵山の噴火が鉄分を含んだ岩石を周辺や海に撒き散らし、それがこの亀田半島東岸の浜に砂鉄を堆積させたと思うのですが・・・・・・・・。

小さな岬を乗り越すと正面に真っ直ぐ恵山に向かって伸びる砂浜の海岸が見える。色が黒い。これはやっぱり砂鉄が堆積しているに違いない。

地図 ナビに古武井の名が記されている。このあたりが 幕末に周辺の砂鉄を使って製鉄を行うため、日本で始めて洋式高炉が建設された地 正面奥恵山の麓の高台がその古武井の地である。



古武井の海岸から恵山・古武井の集落・恵山を望む 道の駅「なとわ・えさん」周辺より 2005.11.14.

運転している家内に道探して 海岸へ降りようと道探す。また、古武井の溶鉱炉跡の案内板がないか・・・と探すが見つからず。右手の丘に風車がまわり、橋に古武井川の名がある川まで来て、直ぐ集落が続く。海岸に下りたいので、道の駅の手前の雑草地まで引き返して、車を止め浜に下りる。

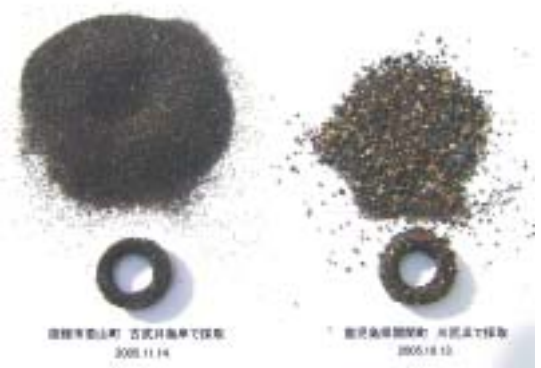
草地から小さな崖を降りると砂全体が深いねずみ色した砂鉄の堆積が崖に沿って帯状に続いている。

その上を鳥が歩いたのだろう点々と足跡が続く。そして この砂鉄帯の波打ち際には波に磨かれた黒い砂鉄が水に生えて すばらしい文様を作っていました。



函館市恵山町古武井 大量の砂鉄が敷詰められた古武井の海岸と砂鉄が織りなす文様 2005.11.14.

すごい量の砂鉄が海岸に堆積していました。
おそらく 恵山の噴火により、海に落ちた岩石が波で洗われ、研磨されて 鉄分を磨きだし、それが浜に堆積したのだろう。
先日 南の端 開聞岳山麓の開聞の浜で見た砂鉄はそれこそダイナミックというか大粒で丸い粒子の堆積でしたが、ここで見る砂鉄は細かい見慣れた形状でした。
同じ火山の噴火でも、その状態の変化が噴出する岩を変化させ、波がこんな変化をもたらすのだろう。



古武井川周辺より 古武井の集落 2005.11.14.

ひとしきり海岸で砂鉄を見たり、北の恵山 反対側に遠くかすむ下北半島を眺めたりした後、道の駅に行つて 古武井の溶鉱炉跡について 聞くのですが、てんでバラバラで良くわからず。

恵山支所まで井って聞けばよかったですけど・・・。

後でインターネット調べると僕が探していた位置よりももつと北側の高台 恵山にもっと近い位置でした。

2. 渡島半島先端の活火山 恵山



山の反対側 恵山火口



恵山 つつじ公園 展望台より 2005.11.14.

「恵山」の標識を見ながら 古武井の海岸よりそのまま海岸にへばり付いた狭い道をを集落の中に入って、恵山への道に折れ、紅葉した林の中を少しいくとつつじ公園の駐車場。

正面に恵山の岩峰がモノトーンの淡い濃淡を示す紅葉の中に埋もれて見える。

どうも こちら側には火口が見えないらしい。どうも この山を越えて反対側に出ねばならないらしい。案内板に 30 分ほど尾根を登って展望台に出る道が書かれている。

周りの紅葉があまりにも素晴らしいので、展望台まで登ることにする。



恵山 紅葉公園 展望台への散策路から見る周辺の山の紅葉 2005.11.14.

今通ってきた古武井の海岸線や山々の山体を彩る紅葉を眺めながら紅葉した尾根の登り道をたどる。

全山真っ赤なかえでが彩る紅葉や 緑・黄・赤のまだら模様の紅葉そして 三段紅葉の紅葉も素晴らしいが、

こんな淡い濃淡が色なす紅葉は初めてである。
山をのぼるにつれ、そんな紅葉が広がって見え、実に素晴らしい。



恵山山麓の山体を彩る紅葉 展望台の登りで 2005.11.14.

30分ほどで正面に荒々しい岩肌むき出しの恵山がそれこそ視野いっぱいに突然現れる尾根筋に出て、恵山の山稜全体が見通せる高台にでて、海岸側の崖の先端に展望台。

恵山の岩肌は見えるが、やっぱり火口はこちらサイドから見えない。荒々しい恵山の頂上から南にすばらしい紅葉した尾根筋が続き、その先左側に遠く亀田半島の海岸線そして太平洋の海が広がって、どちらかという日本画に近い景色である。みぞれ混じりの冷たい雨が時折降り、風が本当につめたい。



恵山 つつじ公園 展望台より 2005.11.14.

恵山から続く稜線の左端の肩を越えてゆく道 車が1台越えてゆくのが見える。
先ほど公園の駐車場へ入ったが、その横の狭い道をそのまま進めば どうも山越えが出来そうである。

平日 どこに行ってもひとがいないので、聞けないのがつらい。

駐車場に戻って、そこから、恵山に向けてさらに登る。展望台から見た山腹を斜めに恵山の南肩を越える道である。見てる間に高度を上げて肩の所をこえると、まもなく眼前に噴煙を上げる恵山の火口がぱっくりとこちら側に口を開けている。



恵山火口の駐車場で 2005.11.14

すぐそのまじかのところに火口が口を開けていて、海岸側から見た姿からは想像がつかない。

また 周囲をぐるっと 360 度 広い火口原が広がり、火口原の中央が駐車場になっていて、ここから周辺に遊歩道が四方に伸びている。

この火口原はゴロゴロした石ころがある白い地肌が点々とし、その間を全面 縞模様の帯状にまるでコケが覆っているかのように背の低い植物が覆いつくしている。あとでわかったのですが、これが有名なイソツツジ。6月下旬には緑のじゅうたんの中に白い花を咲かすという。

そして その向こう荒々しい火口壁の反対側の山々は 初冬モノトーンの淡い濃淡の紅葉で全面覆われた山体を連ね、本当に静寂の中にいる。

駐車場に車を置いて まつすぐ 正面のぱっくりと口をあげ、数箇所からもうもうと蒸気を吹き上げる火口壁にのぼってゆく。静かではあるが、やつぱり すごい迫力である。



今も蒸気を吹き上げる活火山「恵山」の火口 2005.11.14.



蒸気を吹き上げる



恵山の火口



火口の縁をめぐる遊歩道で

2005.11.14.

火口の縁に登ると眼下いつぱいに一面まだら模様の火口原が見渡せ、そこに細い歩道が縫うように続いている。そして、賽の河原と呼ばれる道筋には点々と石が積まれ、風に吹かれて風車がまわっている。人っ子一人いない地で これをみると 死の世界へ入った様でなんとも不気味であつた。この恵山はこの渡島半島と対峙する下北半島恐山と並ぶ霊場であるとの案内板の説明に納得する。吹きすさぶ風の中 それこそ 津軽三味線が聞こえてきそうな風景である。



火口の縁より 火口原

2005.11.14.



火口原はエゾ イソツツジの群落



イソツツジの群落がつづく賽の河原

このまだら模様 近づいてよく見ると小さなシャクナゲのような葉をしているのですが、シャクナゲにしては小さすぎる。これが有名な恵山のエゾイソツツジと聞きました。

6月中旬かに7月上旬にかけ、この火口原 緑の絨毯の中一面に白い花をつけるという。

またこの時期よりは少し早く 約5月中旬から6月上旬 山肌は一面 真っ赤な山ツツジに覆われ、一番恵山がにぎわう時という。

この時には おそらくにぎやかな明るい雰囲気につつまれるのですが、今はみぞれと寒風吹きすさが賽の河原である。

冷たい風に震えながらの今 誰もいないのが、かえって 恵山の火山としてのすごさが見える。

また、晩秋というより初冬の北海道の紅葉 素晴らしい景色でした。

ぐるっと火口壁のまわりまで登って、北の噴火湾の方が見えるところまで、登ったのですが、噴火湾の方は雲でいっぱい、視界開けず。ぶらぶらと火口原を散策して戻ってきました。

この地での洋式高炉建設に一役かった「恵山」。

「鉄山」の名を地図にみつけてはじまったこの函館の walk を思いかえしながら、山を下って、今度は海岸沿いを函館まで帰ってきました。



恵山 火口原の紅葉 2005.11.14.



恵山の肩から太平洋を見る 2005.11.14.

恵山は活火山といっても車で火口原の中まで入り込めるやさしい山。

さらに火口の直ぐ傍まで近寄ることが出来る穏やかなそして小さな山でした。

でも この山がもたらした大噴火が周辺の地形を作り、資源そして文化を支えた。

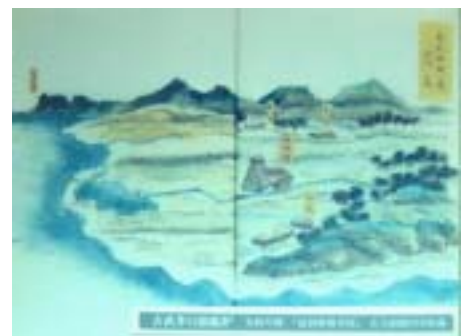
この山が噴出した岩石が磨かれ、山麓の海岸に大量の砂鉄を堆積させている。もっとも この砂鉄は幕末まで見向きもされなかったのだが・・・

そして 日本中央に遠く離れながら、幕末 外国船の入航による西洋文明先進の地として登場し、洋式高炉を建てて 鉄の生産を始めようとする。

この図式は 鹿児島県 薩摩がほぼ同時に洋式高炉を立てた のと同じである。

海岸に堆積する大量の砂鉄が洋式高炉で資源化出来ることを知って小躍りしたに違いない。そして、僻地からの脱却を願ったに違いない。外国船やオランダ書の知識を元に試行錯誤で高炉建設をするのが、眼に見えるようだ。

外国船来航が揺り動かす文化・技術の衝撃の大きさは江戸ばかりでない。ほかにも数々の技術・文化があったろう。すごいものだったことがうかがえる。



残念ながらこの函館も鹿児島もまだ技術不足で高炉操業に失敗するが、先進に夢を膨らませたことだろう。鉄が時代を先取りし、動かして行く。そんな断片が見えたような気がする。

ほんの地図に載っている「鉄山」の名に惹かれて 始めた渡島半島の Walk がすごい広がりを持っていたことに今更ながら驚いている。

高島秋帆 釜石 大橋の洋式高炉操業の成功の前にこの函館古武井や鹿児島薩摩藩の高炉建設があった。まったく知らなかった日本文明開化の鉄の1ページを見ることが出来ました。

函館までの海岸沿いからは 波の荒い津軽海峡 そしてその向こうに大間・下北半島がみえ、行く手に函館の海岸が見えだした頃はもう夕方。 夕日に光る海のむこうにぼつりと館山が見えていました。

満足の日でした。

2005.11.14. 津軽海峡の夕日を見ながら

Mutsu Nakanishi



: 下北半島遠望
津軽海峡 を見ながら函館へ

函館海岸遠望の遠望
2005.11.14.夕

参考 恵山のエゾイソツツジとヤマツツジ インターネットより採取



6月中旬から7月上旬 満開を迎える恵山火口原のイソツツジ



5月から6月 恵山山腹で満開となるヤマツツジ